



第10回韓国スタディツアー 報告書 2016

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟
「2016年度青少年ユネスコ活動助成事業」

杉並ユネスコ協会

はじめに

杉並ユネスコ協会では、隣国である韓国の歴史・文化を理解し、将来の日韓友好を築くため、青年主体の韓国スタディツアーを実施しています。同ツアーは2006年に始まり、ほぼ毎年実施され、2016年12月のツアーをもって節目の10回目を迎えました。

日本と韓国は、ともに東アジアに位置し、その地理的近接性から古くより盛んな交流が行われてきました。稲作や仏教、漢字といった日本文化の基礎を形成する多くのものが、朝鮮半島を経由して日本へもたらされました。日本文化のルーツを朝鮮半島に求めることは、何ら不自然なことではありません。日本と韓国は互いに似た文化を持つ、切っても切り離せない特別な関係であると言えます。

しかし、日韓の間には「歴史問題」という解決困難な課題が存在しています。歴史問題とは1945年以前の日韓の歴史に関する認識の違いであり、とくに竹島（独島）の帰属をめぐる「領土問題」、日本の歴史教科書における朝鮮侵略の記述内容をめぐる「教科書問題」、そして戦時中の日本軍「慰安婦」に対する謝罪と賠償をめぐる「従軍慰安婦問題」が、現在の日韓関係に暗い影を落としています。

そこで本ツアーでは、「日韓の歴史問題について学び、将来の日韓友好のあり方を考える」というテーマを設定しました。かつての日本の加害者としての行為を直視するとともに、それらの問題の解決にむけて、若者の視点から新たな方法を模索することを目的としています。その観点から、まず明治期の日本による韓国植民地化の象徴である西大門刑務所（現在は歴史館になっています）を訪問し、次に元日本軍慰安婦の方々が共同生活をしているナムムの家を訪れました。そして日韓の青年同士で互いに疑問に思っていることをぶつけ合うディスカッションを行いました。さらに歴史問題の根本的原因が戦争であることから、北朝鮮国境まで足を運び、朝鮮戦争の爪痕を見ることで戦争の悲惨さを追体験しました。

これらの経験を通じて、歴史問題について多くの知識を得ただけではなく、同問題に対する日本人・韓国人双方の立場を理解できるようになりました。また、韓国人青年と直接言葉を交わし、若者らしく本音で議論できる貴重な機会を得ることができました。

本報告書では、以上の成果を簡潔にまとめて、歴史問題の現状と将来の日韓関係のあり方について、ツアー参加者の考えや思いを発信したいと思っています。読者の方々には、本報告書を通じて、日韓の歴史問題について興味を持っていただき、両国の文化交流を促進しようとする当協会の取り組みについてご関心を寄せていただければ幸いです。なお、本ツアーは公益社団法人日本ユネスコ協会連盟の「2016年度青少年ユネスコ活動助成」のご支援をいただいで実施しました。この場を借りて、同連盟に心よりお礼申し上げます。

岩野 智

目次

はじめに	
ツアーの概要	1
<u>1 訪問先の紹介</u>	
(1) 西大門刑務所歴史館	3
(2) ナヌムの家	6
(3) 韓国人青年とのディスカッション	9
(4) 非武装地帯／第3トンネル	12
<u>2 日韓平和セミナー</u>	
(1) セミナーの内容	15
(2) 参加者の意見・感想	16
<u>3 参加者の感想</u>	
(1) 西野 月	18
(2) 八尾 成美	19
(3) 池田 芽伊	20
(4) 小林 穂菜美	21
(5) 板倉 徳枝	22
(6) 西野 裕代	23
(7) 岩野 智	24
あとがき	26

ツアーの概要

◆滞在先・期間

大韓民国ソウル特別市

2016年12月26日(月)～29日(木)

◆宿泊先

クリックホテル明洞

(Click Hotel Myeong Dong)

ソウル特別市中区明洞8街59



◆行程

12月26日(月)	12月27日(火)	12月28日(水)	12月29日(木)
10:25 羽田空港 国際線ターミナル 集合	7:30 ホテル発	9:30 ホテル発	7:20 ホテル発
12:25～15:00 大韓航空 KE2708 便	9:30～12:00 ナヌムの家／日本軍「慰安婦」歴史館	10:00～12:00 韓国ユネスコ協会連盟訪問、韓国人青年とのディスカッション	8:00～14:30 DMZ バスツアー (南侵第3トンネル→DMZ映像館・展示館→都羅山駅→臨津閣公園)
16:00 金浦空港発 空港鉄道・地下鉄にて移動	14:30～15:00 独立門にて昼食	12:00～14:00 昼食(韓ユ協連による接待)	
17:00 ホテル着	15:00～17:00 西大門刑務所歴史館	14:00～16:00 ディスカッションの続き	15:30 仁川空港着
18:00～21:30 ソウル大散策、夕食	18:00～21:00 仁寺洞散策、夕食	16:00～18:00 韓国人青年と明洞散策	18:45～20:55 大韓航空 KE705 便
21:30～22:00 ミーティング	21:00～22:00 ミーティング	18:00～19:00 明洞にて夕食	21:30 成田空港にて解散
		20:00～21:00 ミーティング	
		21:00～22:00 ソウル駅散策	

◆参加者

青 年		大 人	
青年部	八尾 成美	理 事	板倉 徳枝
外 部	池田 芽伊	理 事	岩野 智
外 部	西野 月	理 事	小林 穂菜美*
		会 員	西野 裕代

*12/26～27 のみ参加。

◆会計報告

1. 決算<支出>

支出項目	支出内訳 (単価×個数) *	金 額
謝 金	韓国ユネスコ協会連盟への土産 (菓子) ¥3,121×1 韓国青年への土産 (菓子・袋) ¥1,690×1+¥108×6	¥5,459
旅 費	航空券・宿泊代 ¥557,720×1 (6名分) 1人部屋追加料金 ¥17,613 (1名分) 航空券 ¥40,550×1 (1名分) 宿泊代 ¥12,858×1 (1名分) DMZ バスツアー ¥34,490×1 (6名分)	¥663,231
印刷製本費	コピー用紙 ¥429×2 インクカートリッジ ¥3,102×1-¥620 (割引)	¥3,340
雑 費	拝観料：ナムムの家 ¥3,425×1 (7名分) 西大門刑務所歴史館 ¥734×1 (7名分) 交通費：鉄道 ¥12,487×1 (7名分、4日間合計) バス ¥2,172×1 (7名分、4日間合計) タクシー ¥3,992×1 (7名分、4日間合計) 食費 ¥27,438×1 (7名分、4日間合計)	¥50,248
合 計		¥722,278

*為替レートは1ウォン=0.098円(当時)として計算。

2. 決算<収入>

	内 訳	金 額
自己資金	会費等	¥5,459
参加費収入	¥75,000×5名 ¥88,411×1名 (1人部屋) ¥53,408×1名 (12/26～27のみ参加)	¥516,819
日本ユネスコ協会連盟助成金	¥200,000×1	¥200,000
合 計		¥722,278

1. 西大門刑務所歴史館について

ツアー2 日目、私たちは西大門（ソデムン）刑務所歴史館を訪れました。この場所は、20 世紀前半に日本が朝鮮を植民地化していた時代、日本に反抗する朝鮮の独立運動家の人々を収容していた場所で、現在は復元されて歴史館として当時の建物や資料などが展示されています。1908 年に「京城（キョンソン）監獄」として、日帝（大日本帝国）によって建設されました。韓国独立後も刑務所として使われ、1987 年 11 月 15 日に刑務所としての機能が地方へ移転したため、約 80 年の役割を終えました。ソウル市中心部の北西に位置する西大門独立公園内にあり、植民地時代の監獄や死刑場、独立運動の取り調べの様子が生々しく再現されています。私たちが訪れたのは平日でしたが、小中学校の社会科見学や家族連れなども見られました。



2. 歴史館の構成と展示内容

(1) 展示館

展示館では、様々な拷問をしている様子のロウ人形や、その道具などが展示されています。最初に独立運動を紹介する展示や、西大門刑務所の歴史についてパネルでまとめられています。事前にインターネットで調べると残虐な人形がたくさんあり、日本人として胸が潰れる思いをしましたが、いくつか撤去されており、正直ほんの少しほっとしました。

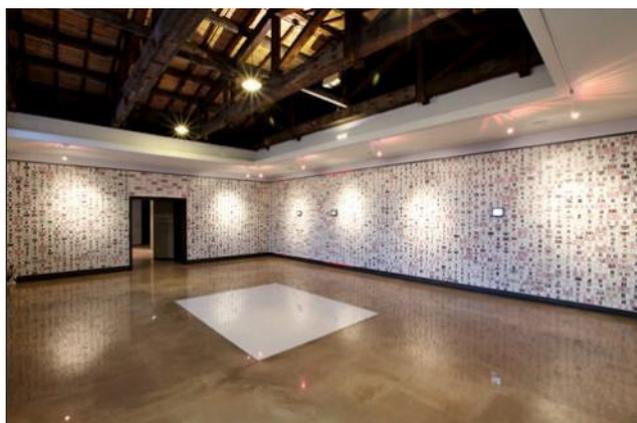


▲1930 年代の建物の配置図と模型

ちなみに、広島原爆資料館で観た被爆者の生々しい人形も撤去されたそうで、これは逆の立場から疑問に思っていました。こういった現象は世界的な流れなのでしょうか？

見学路を進むと、収容者が履いていたゴム製の靴や、おもりのついた足かせ、小さい食器など現物が展示されています。地下の拷問コーナーでは、ロッカーのような狭い箱に立ったまま入れられて 2 日で命を落とす刑や、熱湯をかけさせられるといった目を覆うような展

示がありました。中でも特に印象的だったのが、受刑者の写真と名前が壁一面に貼ってある「追慕空間」と名付けられた部屋です。独立運動に努めた約5000人分の受刑記録票の複製が壁に貼りつけてあります。記録票は終戦時に日本が刑務所を引き渡した際に処分されなかったもので、通算収容者のおよそ8分の1にすぎないといえます。想像を絶する数です。



▲壁一面に飾られた収容者の写真と名前

(2) 獄舎

獄舎は、刑務所を閉所したときに残っていた15棟のうち7棟が保存されていました。1915年に造られた現存する最古の煉瓦造りの獄舎です。吹き抜けになっており、二階から一階の牢屋を見渡すことができます。私たちが訪れた日は氷点下の寒さでしたが、そのような冬を布一枚で過ごしていたといえます。特に独房は真っ暗で「墨部屋（モツパン）」と呼ばれていました。拷問の血や汗の匂いでひどかったそうです。収監者が壁をたたいて隣の監房と連絡をとったり、独立を主張して万歳したりする人形が置かれ、監房の中まで立ち入ることもできます。牢屋は2畳ほどしかなく、戦前からほぼそのまま残る中央舎では、人形を使って看守の事務所をリアルに再現しています。身体を痛めた収監者の写真や元収監者の談話、著名な運動家の回想録などからも、厳しい獄中生活が伝わってきました。

ひとつ確認できず、気になっていることがあります。展示の説明が書かれたパネルは、ハングル、英語、日本語で掲示されていましたが、見学を進めるにつれ、日本語パネルの数が減っていきます。そして、人だかりができていくいくつかの展示物には、なぜか日本語がなく、その場に立ち止まるには気まずい空気を感じ、無言で足早に通り過ぎてしまいました。いったいどのような内容なのか、なぜ日本語訳がなかったのでしょうか。



▲獄舎（3棟が一カ所につながっており、同時に監視することができる構造になっている）

(3) 野外展示

野外展示では、ハンセン病患者の獄舎や女性獄舎、運動場、死刑場などがあり、特に死刑場は印象深いものでした。死刑場と裁判所は同室にあり、裁判長が「死刑」と宣告したと同時に床が外れて、絞首刑が行われるようになっています。以前、映画「私は貝になりたい」で観たものと全く同じ構造で、まるで映画の撮影現場かと錯覚するような光景でした。しかし、これは現実のものだと我に返った瞬間、背筋が凍りつくような感覚に襲われました。

建物の周りは高さ約5メートルの壁で囲まれており、入口脇には死刑囚がすがりついて泣いたとされる「慟哭のポプラ」と呼ばれる木が立っています。塀を隔てて生える2本のポプラ。塀の内側の1本は死刑直前の人々の叫びを吸って、育ちが悪くなったといわれています。



▲死刑場



▲慟哭のポプラ（左側）



▲絞首台

3. 歴史館を訪れて

私は、このような過去に起こった具体的な事実を教わったことがなく、ましてや自ら調べようとしたこともありませんでした。今回のような機会がなければ、過去の別世界のこととして知らずに一生を過ごすこととなったかもしれません。世界中で戦争によって様々な困難を強いられている人々は、今この瞬間にもたくさんいます。平和を願っているだけでは何も変わらない。過去の事実を知った上で、悲惨なことを繰り返さないために何をすべきか考えることが必要だと強く感じました。人が強い憎しみを打ち消すことは容易なことではないかもしれませんが、憎しみが新たな憎しみを生まないようにするために。(西野 月)

ナヌムの家



1. ナヌムの家について

ナヌムの家は、ソウルから 30km 離れた、京畿道広州市のはずれのとても静かな村にある、慰安婦被害女性が共同生活を行う福祉施設であり、1998 年にその敷地内に「日本軍『慰安婦』歴史館」が開館した。この施設は、日韓の市民たちからの寄付・寄贈によって建設された。ハルモニ（元慰安婦。韓国語で「おばあさん」）たちは 1992 年から毎週水曜日、水曜集会と呼ばれる、日本大使館の前で、政府からの公式謝罪と法的補償を要求するデモを続けている。また、ナヌムの家のハルモニたちは、海外で被害を語る活動も行っているようだ。現在では 238 名が従軍慰安婦の被害報告を出し、生存者は 39 名。そのうち 10 名が、現在ナヌムの家で暮らしている。平均年齢は 90 歳になるという。



▲ハルモニたちが暮らす「生活館」



▲日本軍「慰安婦」歴史館



▲慰安婦をイメージした像

2. 従軍慰安婦とは

慰安婦は、戦地の慰安所で、日本軍の相手をさせられていた女性たちである。慰安所は、日本軍兵士の強姦の防止、精神安定などのために作られたといわれている。日中戦争以来、中国で日本軍の強姦が多発し、その非行があまりにも深刻であった。そのため、性病の防止、強姦の防止、精神安定と機密保持の目的のため、慰安所に慰安婦を閉じ込める策を考えついたという。しかし実際は、将校や下士官が独占し、下級の兵士は利用できなかったため、目



▲「生活館」の内部

的は果たされなかったとのことである。

慰安婦として、日本人、朝鮮人をはじめとする当時の日本の植民地の、特に貧しい階層出身の女性が集められたそうだ。



▲左から2番目はイ・オクソン ハルモニ (91歳) その右隣りはハ・ジョンミョン ハルモニ (96歳)



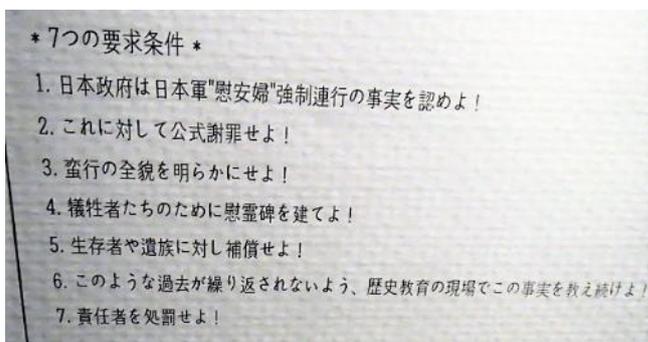
▲再現された「慰安所」入口

3. 慰安婦問題とは

日韓の慰安婦問題では、太平洋戦争中、当時日本の植民地であった韓国の大勢の女性たちが、仕事がある、勉強ができるなどとだまされたり、暴力的な拉致によって連れていかれ、慰安婦として働かされたといわれている。

戦後日本政府は1993年の河野談話でこれについて「お詫びと反省」をし、1995年、村山富市首相の戦後50周年談話で「植民地支配と侵略」を謝罪した。しかし90年代後半に入ると、「慰安婦はいなかった」と主張を変更。高校の教科書、中学校の歴史教科書から慰安婦に関する記述を減らしていき、2006年にはほとんどの教科書から同内容を削除した。韓国では毎週水曜デモが行われており、多くの参加者とともに「日王は謝罪しろ、日本は賠償しろ」と書かれた垂れ幕を掲げ、デモを行っている。

この問題は2015年12月28日に急展開を迎え、日本政府と韓国政府の間で、日本が慰安婦支援団体に対して10億円を拠出する代わりに、韓国は日本大使館前の慰安婦像を撤去するという合意がなされた。しかし日本側が10億円を拠出したにもかかわらず、慰安婦像はいまだ設置されたままで、1年後の2016年12月には、釜山にも慰安婦像が新たに設置された。両国の亀裂は深まり、現在、日本の駐韓大使が帰国する事態にまで悪化している。



▲日本政府に対する7つの要求 (歴史館の展示)



▲ソウルの日本大使館前の慰安婦像

4. 今回のツアーで分かったこと

偶然にも、今回私たちはテレビ局の撮影とタイミングが合い、ハルモニたちと直接言葉を交わす機会を得た。日本人の私たちがどのようにみられているのか、少し心配であったが、彼女たちは、「日本人」に対して恨みがあるわけではなく、怒りや憎しみの気持ちは、日本政府に対してのものであると教えられた。実際、政府関係者はハルモニたちを一度も訪れていないそうだ。訪れた私たちには何度も「来てくれてありがとう」と言っていた。当時の日本の支配（皇民化政策）により、ハルモニたちも少し日本語を話すことができたため、日本語で簡単な会話をすることができた。



▲韓国のテレビ局 JTBC のインタビューを受ける参加者

日韓合意について尋ねてみたが、この合意はハルモニたちへ何も連絡のないまま決められ、ハルモニたちは反対しているそうだ。しかし、ハルモニたちは日韓合意には反対していたものの、日本からの 10 億円は韓国側へ送られ、一部ハルモニたちに分けられたそうだ。



▲ハルモニたちと言葉を交わす



▲ハ・ジョンミョン
ハルモニと握手



▲パク・オクソン ハルモニ
(94 歳) と記念撮影

5. ツアーを終えて

このような被害を受けた人々は韓国人だけではなく、日本軍は中国やフィリピンなどでも性的な暴力を行っていたといわれている。また太平洋戦争中に限らず、ベトナム戦争やアフリカ、現在でも各地の紛争地や IS など、世界でこのような問題は発生している。慰安婦問題のみならず、様々な人道的問題が戦争という環境の中で起こる。誰が悪い、という問題ではなく、戦争というものが引き起こした事態である。過去の真実を伝えること、忘れないことは大切なことではあるが、そのうえで未来にまた同じような事態が起こらないための取り組みを行うことが必要だと思った。(池田 芽伊)

【参考 URL】

アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」 <http://wam-peace.org/ianfumondai/>
コネスト http://www.konest.com/contents/spot_mise_detail.html?id=1959

1. ディスカッションについて

スタディツアー3日目、明洞にある韓国ユネスコ協会連盟にて、韓国の学生の方とディスカッションを行いました。韓国と日本の二国間には現在様々な問題があり、良好とはいえない関係が続いていますが、私たち学生が今回出会い、軽い話題から重い話題まで、本音をぶつけ合うことができたことは良い経験になったと思います。

◆韓国側の参加者

氏名	性別	学年
チャン・ジュンギュ	男性	高校2年
チョン・ミンソ	女性	同上
リュウ・ジウン	女性	同上
ハン・ユジン	女性	大学1年



2. ディスカッションの内容

(1) 日本と聞いてまず思い浮かべることは？

日本人が韓国のアイドルなどに興味があるように、韓国の学生の間では日本の芸能や文化に興味を持っている人が多いことがわかりました。

(2) 日本人が韓国の文化を知るためには何がオススメですか？

チマチョゴリを着てみることを提案してくれました。日本を訪れる外国人が着物や浴衣を好んで着るように、他の国の文化を知るためには、実際にその文化を体験してみることが一番なのかもしれません。

(3) お互いの学校生活について

韓国の学生といえば熱心に勉強をしているイメージでしたが、学生の生の声を聞いてみると、「高校の寮で生活していて、ご飯の時以外は勉強している。毎日勉強で大変だが、親からのプレッシャー、親への感謝などから頑張らなければいけない」という言葉が印象的でした。韓国は日本に比べて、親や年上の方に敬意を表す気持ちが大きいということも感じました。

(4) お互いの国の年越しについて

日本のお正月といえば1月1日ですが、韓国のお正月は日本とは違い、1月末から2月にかけての旧正月にお祝いするそうです。親戚に会いに行ったり、お年玉のようなものをもらったりするところが似ていると思いました。

(5) 韓国では入試と就活のどちらが厳しいですか？

韓国では入試だけではなく、就活も難しいという話を聞いたことがありますが、答えはどちらも厳しいということでした。良い大学に行かなければ就職も難しいという現状に期待はできないそうです。

韓国では入試の時は、パトカーで生徒を送る、リスニングのテスト中は飛行機の離着陸が制限されるなど、受験生に優しい社会のようです。

(6) 将来の夢について

日本人に将来の夢は？と尋ねても、まだ決まってないという答えや、抽象的な答えが返ってくるイメージがありました。しかし、韓国の学生たちは「日本かドイツの駐在警察になりたい」「言語学について研究したい」「日本と韓国の間をつなぐ旅行会社で働きたい」など、具体的な夢を持っていることに驚かされました。

(7) 2018年には韓国で平昌オリンピック、2020年には日本で東京オリンピックが開催されますが、それについてどう思いますか？

東京オリンピックも様々な問題を解決しながら準備を進めている印象ですが、平昌オリンピックは開催が来年にまで迫っています。未だに会場が完成していないことや、建設による環境破壊などが問題になっているそうです。韓国の学生は、ボランティアとして開催に携わりたいと思っている人が多くいるということに親近感が湧きました。



(8) 兵役についてどう思いますか？

日本にはなく韓国特有の制度である兵役。適性検査を受けて、兵役に行くことが決まり、また家族がかかりやすい病気なども調べられ、兵役に就くか決まるそうです。韓国の男性は大学1年生頃から兵役に行く人が多いそうです。ほとんどの韓国人男性が通る道ではあるものの、給料が良いわけでもなく、その間女性たちは勉強しているため差が開いてしまうことなどから、兵役に対して否定的な見方もあるそうです。また、北朝鮮が攻めてくることはまずないだろうという考え方を持っている人が多いとのことでした。

(9) 韓国のリーダーであるパク・クネさんについてどう思いますか？

現在進行形の問題である韓国の国政介入問題。韓国国民は、前代未聞の出来事で本当に恥ずかしいと思っているようです。また、何が正しいのか未だにわからないようで、様々な噂が流れているそうです。

(10) 日本と韓国の歴史問題についてどう思いますか？

歴史認識におけるすれ違いが続く日韓の歴史問題。韓国国民は、日本はお金で解決しようとしている、歴史をなかつたことにしようとしているといった認識があるそうです。また、ドイツのホロコーストと比較されることが多いようで、ドイツのように日本も国際社会において謝罪すべきだという意見が根強いようです。

3. ディスカッションを通して

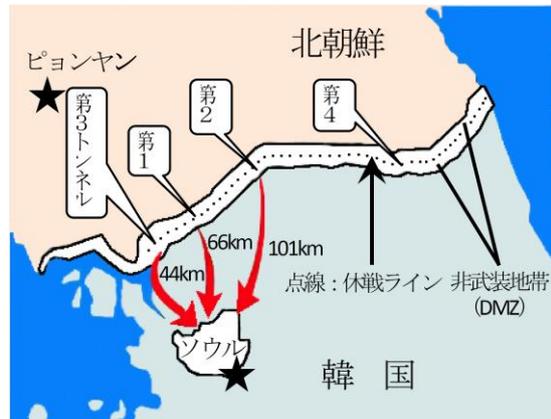
今回のディスカッションでは、普段韓国に対して疑問に思っていたことを素直に聞くことができました。また、たとえ政治的な面において二国間の関係が悪くても、私たち国民がお互いを嫌っているわけではないということに気づくことができました。私たち学生がお互いの文化や歴史解釈について学ぶことで、少しでも関係が良くなるのではないかと思います。将来に対する希望が生まれたディスカッションになったと思います。

帰国してからもお互いの文化を教えあったり、政治的な話題に対して自分の意見を伝えたりと平和への第一歩となるような関係を作ることができたことは、このスタディツアーの大きな成果です。参加していただいた韓国の学生たちとの交流を、これからも大切にしていきたいと思っています。(八尾 成美)

非武装地帯（DMZ）／第3トンネル

1. 非武装地帯（DMZ）

朝鮮戦争（1950～53年）後も緊張の停戦状態が続いている北朝鮮と韓国。南北朝鮮を隔てる長さ 241km の軍事境界線（地図点線部分）は、南北に 4km、総面積 6,400 万坪の広大な非武装地帯（demilitarized zone: DMZ）に指定され、衝突をさけるための緩衝区域として、一切の軍事活動が許されていません。もちろん一般の立ち入りも制限され、60 年以上もの間、ほぼ無人状態に保たれています。



その軍事境界線を超えて北朝鮮が韓国へ攻め入るために掘ったといわれるトンネルが、現在 4 つ発見されています（未発見を含め、20 ほどのトンネルがあるとされています）。今回はその中のひとつ、ソウルから最も近く規模の大きい第3トンネルを訪れました。

2. 臨津閣（イムジンガク）の自由の橋

ここはまだ、非武装地帯ではありません。韓国人が制限なく訪れることができる最北端の地で、離散家族が北朝鮮にいる家族を思って訪れる場所として有名です。朝鮮半島の統一を願って建てられた臨津閣を中心に、朝鮮戦争で実際に使用されていた戦車や飛行機の展示や記念碑などがあります。なかでも特筆すべきは「自由の橋」。停戦後、韓国軍の捕虜 12,773 人が「自由万歳！」と叫びながらこの橋を渡って帰還したことから命名され、私たちが進める最端には、平和を望む多くの人々の願いが掲げられています。



▲「自由の橋」 行き止まりには、鉄柵と軍の監視所。統一を願う旗や北朝鮮にいる家族宛ての手紙が所狭し並ぶ。

3. 第3トンネル

ソウルから車でわずか1時間の場所で発見された第3トンネルは、非武装地帯にあるため、個人での見学は禁止されています。外国人専用ツアーだけが訪れることができ、パスポートの提示も必要です。いよいよ立ち入り禁止区内へ近づくと、ガイドさんから指定場所以外での写真撮影は禁止と再三釘を刺され、検問でバスに乗り込んできた兵士が、私達のパスポートと顔を無言で確認。緊張は高まります。

第3トンネルは、全長1,635m 地下73mにある高さ幅共に2m程度の丸いアーチ型の地下トンネルです。なんと、1時間当たり武装兵士3万人が移動できる規模で、このような岩盤の地層を北朝鮮が密かに掘り進めていたとは脅威的。手荷物を預け、ヘルメットをかぶり、トンネル入口からトロッコ型のシャトルエレベーターに乗って地中へ…かなりの急勾配でゴツゴツした壁面、鉄の足場のようなものも組まれています。トンネル内の写真撮影は厳禁でしたが、壁面には岩盤を爆破させるためのダイナマイト穴や、真っ黒く塗られた石炭跡があちらこちらに見られました。(石炭跡はトンネル掘削が発覚した際に「石炭を採掘していた」と言い逃れるための北朝鮮による偽装だと言われています。)

トンネル途中で下車し、軍事境界線まで約200mの地点まで徒歩で見学することができます。このトンネルを掘り進めた人達は、いったいどんな気持ちでいたのだろう、どれだけ過酷な作業だったのだろう…と思いを馳せつつ油断して進む中、何度も天井に頭をぶつけました。



▲第3トンネルのトロッコ



▲南北の統一を願うモニュメント

(International Cultural Service Club
パンフレットより)

トンネル見学後は、併設されているDMZ映像館・展示館を見学しました。DMZは60年もの間、手を加えられないだけに自然が蘇り、タンチョウやツキノワグマ、アムールヒョウやシベリアトラなど多種多様な絶滅危惧種が生息しているそうです。長年に渡る二国間の緊張の裏で、野生動物にとっての安息地がDMZに形成されているというのは、なんと皮肉なことでしょうか。

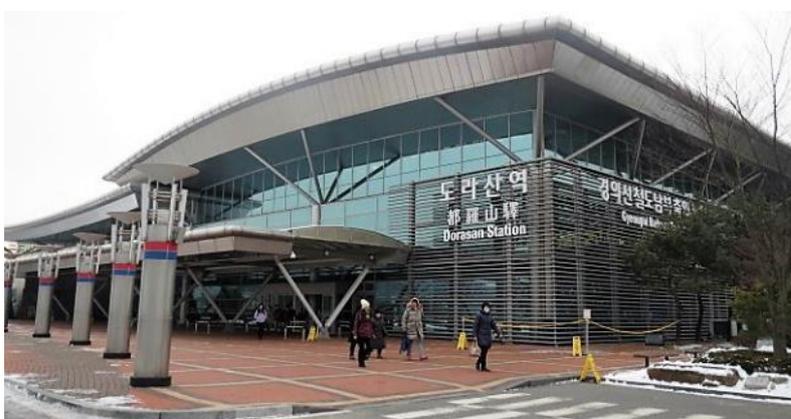
一方で、トンネルを出た周辺は有刺鉄線で囲われています。一步中に入れば、私の足は吹き飛ばされるかもしれません。この DMZ には星の数ほどの地雷が埋められ、世界で最も地雷密度の高い場所であると知り、震えあがりました。地雷をひとつ埋めるのにかかる費用は約 500 円、ひとつ撤去するには 10 万円かかるといいます。埋めるのも人間、撤去するのも人間。なんとも愚かなことでしょう。



4. 都羅山（トラサン）駅

北朝鮮の風景と非武装地帯を眺めることができる展望台は、残念ながら前日の雪で足場がわるく断念しましたが、韓国最北端の駅「都羅山駅」を訪れました。

韓国側への列車は一日に数本ありますが、平壤（ピョンヤン）側へ続く線路はただただ静かに時が止まっているかのようです。この駅は、2002 年 2 月に米国ブッシュ大統領（当時）が訪れて以来、世界的に注目を浴びて、観光地のひとつとなっています。南北統一されれば、中国やロシアを通じて西ヨーロッパまで続く壮大な鉄道。駅構内に掲げられた大きな路線図は、期待と寂しさを同時に醸し出していました。（西野 裕代）



▲北へと続く線路。つながっていても列車は走っていない。